

trivia ■皮膚科のトリビア■ 139

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで見聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

superimposed linear psoriasisとは

第32回日本臨床皮膚科医会総会から（平成28年4月23日）

尋常性乾癬ないし膿疱性乾癬の患者に生じるまれな病型で、多くはBlaschko線に沿う線状ないし帯状の角化性紅斑。通常の乾癬に先行して生じる。ステロイド軟膏外用などの治療に抵抗性で、ほかの部位が治癒しても、そこだけが残存する。inflammatory linear verrucous epidermal naevusに似るが、単一遺伝子のモザイクで生じているわけではない。多因子疾患でも、より発症しやすいゲノム変化をもったモザイクが存在すると、こういった病変を生じることがあり、segmental mosaicism of polygenic skin disordersという概念が提唱されている。「ちょっと難しかったが、多因子疾患と遺伝子モザイクの関連を考えるうえで重要とのこと。扁平苔癬、尋常性白斑、薬疹、アトピー性皮膚炎、環状肉芽腫、多形滲出性紅斑、皮膚筋炎、GVHDなどでも、同様の現象がみられるという。妙な分布の皮膚病に出くわすことはときどきあるので、注意して診ていこう」。

小麦製品摂取後の蕁麻疹で行うべき検査のまとめ

第32回日本臨床皮膚科医会総会から（平成28年4月23日）

小麦による即時型アレルギーでは、抗原特異的IgEのチェックを行うが、小麦、グルテン、 ω -5グリアジンの3項目の組み合わせで、原因や感作経路を推定できる。経口感作による運動誘発アナフィラキシーでは、 ω -5グリアジン > グルテン > 小麦の順に高値を示すが、経皮感作による加水分解小麦アレルギーでは、グルテン > 小麦 > ω -5グリアジンとなる。また、経粘膜感作と考えられるイネ科植物花粉症に合併する小麦アレルギーでは、小麦 > グルテン > ω -5グリアジンとなる。さらに、小麦粉に混入したコナダニが原因の場合も想定し、コナヒョウヒダニも併せて測定するとよい。「接触する部位によって感作される抗原が違うというところが面白い。アレルゲンコンポーネントの検査でわかってくることがこれからもたくさんありそうだ」。

collision tumor

第32回日本臨床皮膚科医会総会から（平成28年4月24日）

臨床像から想像できなかった、意外な病理組織像を呈した病変の呈示。2種類以上の腫瘍が1つの切片に現れるcollision tumorには注意が必要。collision tumorは、同一臓

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

器に病理組織学的に異なった腫瘍が発生したものとされ、その発生時期や臓器内での局在から、以下の3つに分類される。①相接型：両者が接して存在し、渾然一体となっているもの。②衝突型：両者が別個に発生し、互いに衝突または入り交じっているもの。③独立型：両者が独立して存在しているもの。

「臨床像から病理組織像を想像して、診断・治療を行うのは日常的に行っていることだが、主病変に隠れて存在する、主病変とは異なる異常所見に注目することが重要と再認識した」。

「まず、抗BP230抗体がコマーシャルで測定できることを知らなかった。保険適応ではないので持ち出しになるが、これからは抗BP180抗体と一緒にオーダーすることにした。これまでも、臨床からBPを強く疑ったが抗BP180抗体が陰性の症例があったような気がする。開業医では生検組織のDIFを行うことが難しいので、抗BP230抗体の測定の意義を明らかにしてほしいと思った」。

1歳男児はヤケドに注意

第32回日本臨床皮膚科医会総会から(平成28年4月24日)

開業医を受診する熱傷患者の統計。全体の男女比は1:2で女性に多いが、乳幼児では男児に多く、全年齢のうちでも1歳男児の受診が最も多い。30年前の同様の報告でも1歳男児が最多であった。やんちゃで好奇心旺盛な1歳男児の手の届くところには、熱い物を置かないように注意が必要。

「自分の発表で恐縮だが、30年前の統計と同じ結果だったというところが面白かった」。

抗BP230抗体のみが陽性の水疱性類天疱瘡の特徴

第32回日本臨床皮膚科医会総会から(平成28年4月24日)

BP230は表皮細胞内の蛋白で、抗BP230抗体は活動期の水疱性類天疱瘡(BP)患者の60%で陽性になる。抗BP180抗体がBPの発症に深く関わっていることは明らかになってきたが、抗BP230抗体の意義はよくわかっていない。活動期に抗BP180NC16a抗体が陰性で抗BP230抗体(コマーシャルで測定可能なりコンビナント蛋白が抗原)のみが陽性のBP症例は、掌蹠に水疱が多い傾向があった。国外の報告では、水疱が少数で軽症例が多いとされているが、全身に水疱をきたす例もあり、さらなる症例の蓄積が必要である。

